試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2018年度

横須賀学院中学校

英語入試

国語

１．この問題冊子は表紙も含めて５ページあります。

２．試験開始の合図と共に、まず問題冊子の印刷を確認しなさい。印刷の不鮮明なところ、ページの抜けや解答用紙の汚れなどに気付いた場合は、すぐに手を高く挙げて監督者に知らせなさい。

３．印刷の確認が出来たら、解答用紙に記名をして解き始めること。解答はすべて解答用紙に書きなさい。また、字数指定がある場合、特に断らなければ句読点も一文字と数えます。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

だれもがかぜをひいたことがありますよね。かぜをひくと熱やせきがでて大変な思いをしますが、数日もすれば治ってしまいます。これは「免疫（めんえき）」という体のしくみが私たちのかぜを治してくれているからです。

免疫は、細菌やウイルス、がん細胞など、自分の体にもともとない「異物」をやっつけて体を守ろうとするしくみです。免疫は、いろいろな役割をもつ免疫細胞が働くことで成り立っています。異物がいないかパトロールする細胞、異物への攻撃を命じる細胞、攻撃をする細胞などです。これらの免疫細胞がバトンリレーのようにつながり、異物をやっつけます。

免疫が働くほど、私たちの体は病気から守られてよいことづくしな気がしますね。しかし、免疫細胞はときどきミスをすることがあります。もともと体の中にあるものを異物とまちがえて攻撃し、病気を引き起こす「自己免疫疾患（しっかん）」、

花粉や食べ物など、体に入ってきた無害なものを攻撃してしまう「花粉症」や「食物アレルギー」。免疫細胞が攻撃する相手をまちがえた場合、攻撃を止めるしくみは体に備わっていないのでしょうか。

１９８５年、大阪大学の阪口志文（しもん）先生が攻撃にブレーキをかける「制御（せいぎょ）性Ｔ細胞」を発見しました。当時、「そんな細胞はない」と考えられていたため、制御性Ｔ細胞は世間に認められませんでした。

（　１　）、坂口先生は地道に研究を続け、およそ10年後には誰もが存在を認めざるを得ない証拠（しょうこ）を見つけたのです。

研究の結果、制御性Ｔ細胞はまちがった敵への攻撃も止めてくれますが、がん細胞への攻撃も止めてしまうことがわかりました。（　２　）、まちがった相手を攻撃しているときに制御性Ｔ細胞をおとなしくさせることができれば、

自己免疫疾患や花粉症を治せるかもしれません。（　３　）、免疫細胞ががん細胞を攻撃しているとき、制御性Ｔ細胞をおとなしくさせることができれば、がんが治るかもしれません。[4]このように坂口先生は健康を保つうえでとても大切な細胞を発見したのです。

（朝日小学生新聞　２０１７年９月29日の記事より）

問一（　1　）～（　3　）にあてはまる言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。（同じ記号を二回使ってはいけません。）

ア、もし　　イ、しかし　　ウ、一方

問二　――4「このように～したのです」とありますが、あなたが「健康を保つうえでとても大切だと思うこと」、「健康を保つうえで、今後発見されたらよいと思うこと」をできるだけ具体的に、自由に書いてください。